

んで理解できるか、保管上の問題、価格、郵送等について審議された。

結論として、新しい試みとして編集委員会の意志に任せることとした。

6. 「山本・正野論文賞」推薦委員会について

今年度は、暫定的に旧「山本賞」の担当理事が、新しい賞の推薦委員委員長を担当することとし、委員の選出も一任することにした。

次期理事会からは理事職務分担の際、「山本・正野論文賞」担当理事も決めることとする。また、「山本・正野論文賞」設立の際の理事会覚書を委員会に渡す。

7. 担当理事の変更について次のとおり承認された。

「教育と普及」

新 古賀 晴成（気候変動対策室）

旧 安田 延寿（気象大学校）

編集後記：本誌がお手元に届く頃には北海道でも桜の便りが聞かれる頃ではないでしょうか。今春は各地で桜の開花の早い記録が更新されています。東京では今年1990年のソメイヨシノ開花は3月20日（平年3月30日）、満開は3月26日（同4月7日）で、これまで最も早かった昨年1989年を上回る早さでした。この4年続きの暖冬と、「地球温暖化」が政治のキーワードにまでなったこの世界情勢との「偶然」の符合にわれわれは何を読みとるべきなのでしょう。

さて、小生の編集委員会での仕事は、3か月に1回の本誌の校正です。現在は3の倍数の月号を担当しています。校正は小生のような編集委員会事務局員の他に、著者と、編集書記のH氏の計3人で行われます。表の数値や文献のページに1つ誤植が残っただけで、多くの人に迷惑を及ぼすわけですし、なにより貴重な研究の成果である論文に、大きな傷を残すことにもなりかねません。毎回気を引き締めて取り組んでいます。

小生のところに校正が回って来るときには、原稿の他に著者校正もあわせて付いています。皆さん自分の原稿ですから、非常によく見ておられるのですが、中には見落としただけで、思わず投稿の熱意を疑いたくなるような著者校正もたまにあります。多忙で大変ということもあるのですが、「著者校正で直されていない部分は、

誤植と見えても著者が認めたものであり、そのまま掲載すべきである」という理屈も成り立つわけで、是非しっかり見ていただきたいと思います。とあって、原文を手直しするのはもちろん御法度ですが。

最後にふだんからの感想を思いつくまま書いてみます。参考にしていただければ幸いです。◎校正は1人でやるべきである。2人での読み合わせ校正は百害あって一利もない。2人が校正に従事できるなら、2人で別々に行えば転じて最良の方法となる◎表題、著者名、頭見出しをまず最初に見るべきである。特に頭見出しは原稿にないせいか、非常に見落としが多い◎文献の引用方法は雑誌によって違いますが、「天気」にも投稿規定で決めたやりかたがある。これが守られていない原稿は編集書記が直して印刷所に渡しているが、投稿段階で規定を守っておくべきだろう。表、図の番号の付け方も同じ（「図1」、「表2」ではなく「第1図」、「第2表」）◎眠たくなるような文章は、なぜか誤植が多い（眠くなるのは浅学の小生の責任で著者の罪ではないとの声あり。）また、読みやすい字、ワープロ原稿はやはり誤植が少ない。

これからも「緑の下の赤鉛筆持ち」として努力していきたいと思います。皆さんの御協力をお願い致します。

（あきら）